

観心寺如意輪観音像の思想的背景と制作年代

高橋 早紀子（京都大学大学院）

真言密教僧実恵・真紹によって創建された観心寺に安置される観心寺如意輪観音像は、空海の請来した密教經典や図像に基づいて初めて本格的に制作された六臂如意輪観音像である。本像は六臂如意輪観音像の嚆矢として重要な作例であるにも関わらず、その思想的背景は未だ明らかにされていない。また、願主と制作年代に関しては、『観心寺勘録縁起資財帳』に記される「嵯峨院大皇太后御願堂」が如意輪観音像を安置する講堂と考えられることから、一般に、講堂ひいては如意輪観音像の願主は嵯峨院太皇太后橘嘉智子とされ、その没年の嘉祥三年（850）が制作の下限とされる。しかし、具体的な制作年については諸説あり、定説を見ないのが現状である。

そこで本発表では、儀軌・經典や『観心寺勘録縁起資財帳』を再検証し、これまで十分に検討されることのなかった観心寺如意輪観音像の思想的背景を解明することを目指す。そして、定説を見ない制作年についても私見を提示したい。

第一に、儀軌・經典における六臂如意輪観音の意味を問い直し、六臂如意輪観音台頭の背景を検討する。まず、不空訳『観自在菩薩如意輪瑜伽』が即身成仏を果たすための五相成身観を説く金剛頂經の一つとされることに注目し、六臂如意輪観音の像容が五相成身観の観法本尊として説かれていることを論証する。そして、こうした六臂如意輪観音と図像の一致する観心寺如意輪観音像にも、五相成身観の観法本尊としての宗教的機能があったことを明示する。

第二に、創建期の観心寺における如意輪観音の位置づけを再考し、観心寺如意輪観音像が護摩修法の本尊であったことを新たに指摘する。具体的には、空海決・実恵記『四種護摩口決』に説かれる四種護摩修法の各本尊を『観心寺勘録縁起資財帳』に記される尊像構成と結びつけることにより、観心寺が四種護摩修法を行う道場として構想され、観心寺如意輪観音像が四種護摩修法の一つである和合親睦を祈る敬愛法の本尊として制作されたことを究明する。

第三に、こうした思想的背景と橘嘉智子の「御願」との関連を追究し、観心寺如意輪観音像の直接的な造像契機が承和九年（842）に起こった承和の変であったことを論じる。すなわち、承和の変の前年に実恵から灌頂を受けていた橘嘉智子が、自らが発端となった承和の変によって顕在化した様々な抗争や対立の中で、和合親睦を祈る敬愛法の本尊として観心寺如意輪観音像の造像を発願したことを示す。そして、修法との関連という新たな視点から、本像の制作年として、河内国国守が観心寺別当に充てられた承和十年（843）を提示する。

以上のように、観心寺如意輪観音像が即身成仏を果たすための五相成身観の本尊であり、四種護摩修法の敬愛法本尊であることを論証し、橘嘉智子の「御願」が和合親睦であったことを明らかにするとともに、承和の変と修法との関連からその制作年を提示することが本発表の目的である。